

# Glocal Tenri



8

月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.14 No.8 August 2013

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- 巻頭言  
原潜の睨み合い  
／深谷忠一 ..... 1
  - 天理教伝道史の諸相 (20)  
甲信越の天理教  
／早田一郎 ..... 2
  - 「おふでさき」の有機展開 (16)  
第三号：第四十九首～第六十七首  
／深谷耕治 ..... 3
  - フランスで育つ日本人の子供たちへの  
日本語教育 (8)  
天理日仏文化協会こども日本語講座の  
取り組み⑧  
／田中久代 ..... 4
  - 新宗教のブラジル伝道 (4)  
キリスト教の変容①  
／山田政信 ..... 5
  - 「いのち」をつなぐ一生涯の現象 (20)  
死者と生者の間に①  
／堀内みどり ..... 6
  - 「襲のあわいに深く入り込んでいて…」  
をめぐって (10)  
襲のあわい——その火口⑩  
／松田健三郎 ..... 7
  - ノーマライゼーションへの道程 (18)  
福祉のまちづくり⑤  
／八木三郎 ..... 8
  - 天理参考館所蔵の漢族資料 (6)  
玩具③  
／中尾徳仁 ..... 9
  - ヴァチカン便り (3)  
新法王の取り組み  
／山口英雄 ..... 10
  - 平成 25 年度公開教学講座「信仰に生  
きる」：『逸話篇』に学ぶ (2)  
第 3 講：21「結構や、結構や」  
／佐藤孝則 ..... 11
  - 図書紹介 (77)  
『聖なるものをめぐる哲学 ミルチャ  
エリアーデ』  
／澤井義次 ..... 12
  - English Summary ..... 13
  - おやさと研究所ニュース ..... 14
- 第 4 回「宗教と環境」研究会を開催／第 5 回「宗  
教と環境」研究会を開催／『グローバル天理』  
合本のご案内／第 261 回研究報告会／第 262 回  
研究報告会／第 59 回伝道研究会／京都大学「震  
災と語り」シンポジウムに指定討論者として参  
加／平成 25 年度公開教学講座開催のご案内

## 巻頭言

### 原潜の睨み合い

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

今から 30 数年前、ある米海軍退役士官の女性と知り合いましたが、頭脳明晰な彼女から聞いた海軍時代の話は驚くべき内容でした。

冷戦当時の米ソの最前線は現在と同様に潜水艦での睨み合いでしたが、その米海軍の各潜水艦がどの海域で潜っているのかを把握しているのは米軍内でも彼女だけでした。つまり、全ての潜水艦の動向は紙媒体はもちろん他の電子機器などにも一切記録が残されていず、彼女の頭脳がコンピューターの役割をして秘密保持をしていたというのです。その後、米軍はインターネットを開発して今はさらに緻密な情報管理をしているはずですが、昨今のサイバーテロや機密漏洩事件などを見聞すると、人間コンピューターの方がよかったのではないかと亡き彼女の顔が浮かんできたりします。

さて、昨今の米海軍の潜水艦は海中から世界中の何処へでもミサイル発射が可能な戦略原子力潜水艦が主力ですが、この原潜には 1 発あたり 10～14 発の核弾頭を搭載した多弾頭式の弾道ミサイルが 16～24 基搭載されていて、1 隻がフル稼働するだけで 1 つの国を完全に滅亡させられるだけの破壊力があります。

また、ロシア海軍も今年 1 月には射程 8,000km で核弾頭を 16 個積める潜水艦発射弾道ミサイル (SLBM) を搭載する最新鋭の原潜を就役させており、2020 年までに同級の原潜を 8 隻配備する計画を発表しています。そして、こうした原潜は他の核保有国である英、仏、中、印のものも加えて、常時少なくとも 20 隻以上が世界のどこかの海に潜っているとされています。つまり、今この時も世界では、核弾頭を積んだ原潜どうしの睨み合いが続いているのです。

そして、このような原潜の原子炉では地上の原発燃料の 20 倍に相当する 90% 超の濃縮ウランを使って、関西電力美浜 1 号炉の 3 分の 1 に相当する 30 万 kw の発電をしています (原子力空母は 120 万 kw)。ですから、原潜が燃料を使いきった段階では、広島型原爆

にして 100 発分以上に相当する核分裂生成物質が発生するのです。そして、原潜も人間が作ったものである以上種々の故障も起こります。地上の原発はそれが止まるほどの大地震に揺られるのは数百年に 1 度ですが、原潜の方は常に高水圧の中や荒波の海上を動きまわっていますから、種々の衝撃で炉や配管が破損して放射能漏れ・被曝・爆発炎上などの事故が起きる可能性は大きいのです。

また、戦略原潜の 1 回の航海は 2～3 カ月。70～90 日も連続で暗い海中での生活が続くのですから、その間に乗組員の精神が不安定になる心配もあります。幸いにして、これまでは核弾頭ミサイルの誤射はありません。しかし、原因不明の事故で沈没した原潜はアメリカの USS スレッシュャーや USS スコーピオン、旧ソ連の K-8, K-219, K-278 コムソモレットなど何隻もあるのです。また、旧ソ連のある原潜などは“修理は不可能で廃船にするにも多大な費用がかかる”との理由で船底に穴をあけられて海に沈められているのです。これらの沈没した潜水艦の核弾頭や原子炉は、海中で冷却されているので問題がないとされていますが、もしそれでよいのなら、海に浮かべたメガフロートの上に原子力発電所を作ればよいということにもなりましょう。

私たちが原子力利用の可否について語る時には、民事、軍事両方の原子炉のことを問題にしなければなりません。そして、もし核利用の廃絶を言うのなら、その前提として核弾頭を装備した原潜の睨み合いの根本原因である民族・国家間の対立の廃絶を成し遂げねばならないのです。そして、そのためには世界中の全ての人々が健康で文化的な生活ができるように、安価で安定した電力を供給することも大事なのです。古今東西の争いの原因の多くはエネルギー源の争奪にあり、“今年の夏の日本の電力は賄える?!” などと自分の国さえよければの話だけをしているようでは、何時までたっても世界中の睨み合いはなくなることはないのです。